

### 第3回ふくい建築賞 総評 「対話の積み重ね」

審査委員長 金沢工業大学教授 水野一郎

「ふくい建築賞」は第3回を迎えました。この賞は福井県の建築設計に係わる3つの組織（建築士会・事務所協会・建築家協会）が一つになり、自らが切磋琢磨して福井の建築文化を向上させようと立ち上げたものです。従って応募者は福井県在住の建築士であり、応募作品は福井県内に立地する建築です。審査員は初回から福井大学（高嶋）福井工大（吉田）金沢工大（水野）の教員3名です。

今回は一般建築部門10点、住宅部門9点の応募があり、一次審査は応募書類により一般建築5点、住宅建築5点を選考し、二次審査は2日間に亘る現地審査でそれぞれ3点ずつを選び最終審査の対象作品としました。恒例の福井県立図書館での最終審査はご存知のように施主、建設業者、設計者の他に一般県民も参加しての公開審査で行われました。

今回も質の高い6作品が揃いました。いずれも第1・2回と同じく施主と設計者がどのような建築にするかの対話を積み重ねながら個性的な内容に高めた作品を生み出していることが印象的でした。両者が話し合うことが往々にして没個性的な平均点に落ち着いてしまいがちですが、独自のデザインに到達していることすばらしい。このあたりが福井の県民性や価値観と通じているように思え「福井らしさ」かなと評価しています。

次に印象的だったのは立地環境と建築との対話です。環境との対話というと一般に「調和」が語られますが、「対立」を持ち込むこともあります。今回の6作品いずれも周辺環境と調和を図りながらも、対立的なデザインが採用されていて刺激的なクリエイティビティを環境に投げかけ活性化させています。

以上のように対話を重ねて個性や対立を創り出しているという視点で最終選考に残った6作品を再度見直していただけたら幸いです。

最優秀賞は一般部門で「むらかみ食堂」住宅部門で「CUBOID HOUSE」が選考されました。毎回のことながら一つを選び出すのには苦勞します。結論としては3審査員の投票点数の合計点で決めています。それ故に審査員各人にも自己の評価基準からみて納得がいかない結果という場合もありましょう。今回も若干評価がバラついたので審査員だけではなく、会場の参加者の中にも「うーん、そうかな」と思われた方もいるでしょう。そのような審査経過を顧みるに、公開会場にて各審査員の評価についてもっと丁寧に議論しあうのが必要ではないかと思えます。そして審査投票の合計点で決めるのは止むを得ないにしても、選考結果に納得しながら自分は別の選考だと確認することが出来れば理想的です。ここでも良い建築のためには「対話の積み重ね」です。

### 第3回「ふくい建築賞 2016」の審査を終えて

審査員 吉田 純一（福井工業大学）

◆ふくい建築賞の審査も3回目となり、いくぶん慣れてきたようで、余裕をもって審査に当たれたように思う。再三触れてきたように「建築 = 建物 + 人」の持論にブレはなく、今回も建物と人との関わり方が主要な視点になったことは言うまでもないが、今振り返ってみると、今回は無意識のうちに建物そのものの機能性や美しさ、あるいは地域とのかかわり方も重要な評価の観点になっていたように思う。

◆一般建築部門の応募作品は10点であった。昨年は8点で、その中に形式的には住宅に類する作品が3点含まれていたが、今回はほとんどの作品が私がイメージする一般建築であり、充実感を覚えました。これらの中からめいりん保育園と坂井こども園、むらかみ食堂、MAGIC SQUAE、大山クリニックの5点が2次審査へ進み、現地審査を経てめいりん保育園、MAGIC SQUAE、むらかみ食堂の3点が選考された。これら3作品は幼児施設、事務所、医療施設とそれぞれ性格や機能が異なり、最終審査では悩んだが、結果的にはむらかみ食堂を推薦した。大学に勤めながら農家の長男坊として農作業にも関わっている私にとって、これからの農業と建築の関わり方にひとつのヒントを与えてくれたこと、建築的にも福井のあちこちにみられる農村集落の風景にうまく溶け込み、小規模ながらも豊かな空間を創造していること、その中で自作の農産物を食材として提供し、来客はゆったりとした田園風景も味わうことができるといったことなどに共感を覚えたからである。MAGIC SQUAE、めいりん保育園も捨てがたい作品であった。特に前者のMAGIC SQUAEはこれこそ私がイメージする一般建築であり、応募書類の写真にみる外観デザインも良く、1次審査では好印象を持っていた。ところが、2次審査で訪れた際、東側の外観や隅々まで行き届いた内部デザインは思った通りであったが、市街地からのアプローチ面、すなわち西側の外観からはまるで倉庫。周囲に高い建物がなく、この地域におけるランドマークとしての意味ももつ建築なのに……。残念であった。後者は遊戯室や園児室、曲線状の廊下（通路）の取り方などはさすがでしたが、園舎と中庭との関連性がやや希薄と感じた。管理上の問題はあろうが、中庭こそ園児が園舎から飛び出してのびのび自由に遊びまわれる場所であり、園舎と中庭のつながりに不満が残った。この他、1次審査で選外となったものの、敦賀赤レンガ倉庫は県内における最初の近代建築の再生事例であり、興味深い作品であったが、古建築がもつ歴史性や材質感などが十分に反映されていない点に物足りなさを感じた。

◆住宅建築部門は9点で、昨年度より1点減であったが、内容的には充実していたように思う。このうち、和田邸、CUBOID HOUSE、村国の切通し、現代美術館の家、小浜鹿島の町家の5作品が2次へ進み、最終的にはCUBOID HOUSE、村国の切通し、現代美術館の家の3点が選考された。設計活動には縁のない私にとっては3作品ともに甲乙つけがたいものだったが、間口が狭く、奥に長い、いわゆるウナギの寝床と称される旧来の伝統的な町家の敷地条件を苦にせず、豊かな内部

空間を創りだしていた CUBOID HOUSE に特に目を奪われた。さらに町家は本来閉鎖的なものであるが、隣の空き地を活かしながら人を呼び込む、開放的な空間を創りだしている点もこれからの町家の有り方の一つとして興味深く、最優秀に選定した。現代美術館の家は大小のキュービックをつなぎ、外観、内部ともに白で統一した刺激的な作品で、まさに現代美術館を思わせる洗練された作品であったが、ここに自分が住むことを考えるとややビビってしまった。また、角地にあって通り景観的にも強烈なインパクトを与えることは間違いないが、開口部がなく閉鎖的でありすぎることに疑念を抱いた。切り通しの家は斜めに切った土間を介して庭と当家の神木をつなぐというコンセプトをもつ作品で、内部の1、2階の動線にも工夫がみられ、興味深い作品であった。しかし、現況では庭、神木がなく、今一つ切り通しというコンセプトも明確でなかった。庭園の整備、神木の再生を期待したい。この他、最終選考には残らなかったが、小浜鹿島の町家は第1回において最優秀賞を受賞し、小浜三丁町の町家改修を手掛ける設計者の作品であったが、住宅は出来上がっているものの未だ住人がおらず、生活感が感じられなかったのが残念であった。

◆3回の審査に関わらせていただいた今でも「ふくい建築」って何か？と問われても、皆目見当がつかず、答えられない。こんな私が審査員を務め、主催者の建築士会や事務所協会、建築家協会の方々には大変なご迷惑をおかけしたと思う。水野先生と高嶋先生にはそれ以上にご迷惑をおかけしたはず。深くお詫びしたい。でも、私にとっては「建築＝建物＋人」という私の持論を改めて確信することができ、きわめて有意義で、貴重な体験になった。改めてお礼申し上げたい。最後に「ふくい建築賞」がこれからも回を重ねながらより活発に展開され、福井の建築の発展に大きく寄与されんことを、そして福井の建築士会・事務所協会・建築家協会のますますのご発展を祈念し、結びとしたい。3年間ありがとうございました。

## 入賞作品の講評

審査委員 高嶋 猛 (福井大学)

### むらかみ食堂

むらかみ食堂は、福井市南西部郊外の田園地帯に位置する。里山の景観を残す東山麓に緩やかにたたずむ集落の東端部にひっそりと建ち、背後の緑と伝統的な集落の景観との調和を図りながら建てられている。

30席余のこじんまりとした食堂で、自然食材の素材を大切にしたいメニューを提供している。このコンセプトと立地条件から、形態と素材と色彩が選択されたと思われる。外壁の下見板張りは集落の土蔵の簾子下見板張りの調和を狙ったものであろう。一転して、内部はテーブル・椅子とも木の素材を現した落ち着いた空間で構成され、東側の大きな開口部から望む田園や遠くの家々をのぞきこむようにしている。この色彩と素材の境界となる開口部は、銜い無く杣材から素木を見せている。

外部の柱下部の扱いや室内の独立柱の角など、木の持つ素材の加工性を考えると、建築的にまだ優しくできる余地は残されている。また、背面の設備機器の扱いにも、この建物の大きな特徴である「まき庫」等の工夫での景観的配慮が望まれる。

## めいりん保育園

福井市の市街地南部の住宅地に立地する保育園で、周辺は多くが2階建ての住宅である。東西2面の道路に面し、玄関を道路反対側に駐車場のある東側に配置し、西側は厨房への搬入経路とする。

建物の壁は全体が緩やかにうねり、全体としてやさしい表情を与えている。また、色使いも大胆で、子どもたちの活気を目指した空間構成が意図されていると感じられ、これらの形態がこの保育園を特徴付けている。その中で、ホール(遊戯室)は室内に面する部分を大きく開閉できる建具を持った楕円形平面とし、ハイサイドライトを採った気持ちの良い空間である。

敷地面積が制約された敷地で考え抜かれた平屋建の計画であるが、園庭が狭く、園庭と内部との関係も庇が短いため希薄になっていることにも工夫が欲しいと感じたのは欲張りであろうか。

## MAGIC SQUARE

福井市郊外の医療機器関連企業の分館である。敷地は本社社屋の西方約200mに位置し、西側を除く3方が道路に接する。

建物は5層の南北に長い平面形を採り、北側は5層の吹き抜け空間と上下階への交通空間とする。1・2階は倉庫で、上階は事務室や会議室とし、東面に休憩などの小空間を採ることでカーテンウォールの単調さに変化を与えている。また、各事務室等は要求された機能に基づいて空間的に変化を設けた構成を採っている。

建物の玄関を北側に採り、吹き抜け空間に玄関ホールとしての機能を持たせている。北側の大きなカーテンウォールから採光され、全体的に金属と黒の世界の印象が強い緊張感のある空間となっている。執務空間への導入部分としての空間であるが、もう少し暖かみが欲しいように感じられた。

東側の本社社屋側から望む構成は、夜間の照明計画も含めて見事であるが、西側敷地に増築を可能とした計画であるため、市街地からアプローチすると増築予定の西面がまず視界に入る。簡略された構成であることは理解できるが、色彩や開口部の扱いに配慮し、増築前の形態としても調和のある構成が望まれる。

## CUBOID HOUSE

福井市の市街地中央部の比較的家屋が密集した地域に建つ個人住宅である。道路を南側に持ち、道路際は東に少し張り出した南北に長いL字型の敷地である。改築前の住宅は南側からの採光をより多く確保するため、南側の間口いっぱい東西に長く建てられていたが、今回は南北に長く西に寄せて建て、北側の住宅への通風と採光に配慮した配置計画としている。この周囲の環境への配慮は特に評価でき、また、住宅南側には住宅の第一リビングを配置して外部に開き、「まちに開いた」構成ともなっている。

南北に長い住宅は中庭を有効に配置しながら構成される。一番奥の老人室が孤立しないように脇に浴室を設け、1階のサービス動線の回遊性も確保されており、暮らし方にも良く配慮されている。外観構成や玄関から奥に向かう内部構成、高すぎない天井とその圧迫感を感じさせない手法なども見事である。

陸屋根に近い屋根形態で、積雪を少なくするためにパラペットを極力立ち上げないという構成により高さを抑えた外観構成のプロポーションも巧みである。ただ、北陸・福井の雨や雪が多い風土性を考えた時、軒や庇のない外部構成には疑問が残る。

## 現代美術館の家

美術をこよなく愛し、自らも創作に励むクライアントからの、建物全体を展示空間とするような住宅への要望に対する提案である。

敷地は鯖江市の新興住宅地の南西角地である。大きさの異なる5つの白い箱によって平屋建で全体が構成され、道路に面する西側は閉鎖的な扱いである。南面は東西二つの箱を前後にずらして設け、その間に控えめに設けられた玄関を通過して内部に入ると、空間は一変する。採光・通風に配慮しながらプライベートな空間を確保するために、小さな庭を配置し、基本的に外部には閉じ、中庭に向かって開き、内外部とも白い箱とする空間はあくまでも明るい。ただし、壁面を大きく穿つように袖壁と庇を深く設け、福井の風土性に配慮した構成となっている。

白い箱を実現するために採用された外壁と地面との接点も見事で、照明や各種建築金物にも目が届いた、完成度の高い建築である。

## 村国の切通し

敷地は越前市東部の集落の一角で、北と東に道路が通る。敷地西側に母家、南に納屋が建ち、北東の角地が今回の敷地である。この角地の北東部に庭を設け、その庭を囲むように建物はL字型の平面としている。玄関は敷地内部の南側に設け、道路際には塀と大きな門扉を設けている。

設計者が「切通し」と名付けたL形の中央部分がこの住宅を特徴付ける空間である。板床と土間による大きな吹き抜けは心地よい開放感があり、土間と外部との繋がりにも配慮された空間は見応えがある。また、バックヤードも充実している。

内外部とも屋根を支える大きな垂木がデザインの大きな要素となっているが、リズムの美しさが欠けている点や、西側外部の大きな目隠しの木製スクリーンが構造体ではなく、鉄骨が構造を引き受けている構成や、配線、設備機器の見え方にも配慮が加わっていれば、さらに完成度が高まったと思われる。